（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	田中　文菜
論文題目	愛着と養育 ―カメルーン東南部の狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為の民族誌―		

（論文内容の要旨）

本論文は、カメルーン東南部に住んでいる狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為の記述と分析をおこない、それをふまえてジョン・ボウルビィの提案以降さまざまな研究者によって議論されてきた愛着理論を再検討し、新たな研究の展望を提示したものである。

序章では、ボウルビィの愛着理論とその後の展開についてレビューし、狩猟採集民の養育において母子密着とマルチプル・ケアテイキングのいずれが重要であるかが論点となってきたことを確認した。そのうえで、それらの二者択一にならないように狩猟採集民の子育てについて論じる、と本論文の視座を定めた。

第1章では、マルチプル・ケアテイキングの例とされてきたバカと母子密着の例とされてきた南部アフリカの狩猟採集民クンを対象として、養育行動と乳幼児の行動を同じ指標をもちいて量的に比較している。その結果、バカでも母子密着の重要性が示唆され、クンでもマルチプル・ケアテイキングの存在が示唆された。したがって「子育てにおいて母子密着とマルチプル・ケアテイキングのどちらが本質的か」という問いは論争のための問いであって、じっさいには母子密着とマルチプル・ケアテイキングが両立していること、したがって狩猟採集民の子育てを理解するためには、どちらがどのような場面において機能しているかについて丁寧に分析する必要があると指摘した。

第2章では、母親との結びつきが強い離乳前の2歳前半児を主な対象として参与観察をおこない、量的データでは捉えきれないバカの養育行動と幼児の愛着行動について記述・分析している。居住集団の構成が頻繁に入れ替わるバカの社会では、生業活動・家事・ケアは、その場その場で生じる集まりのなかで連携しておこなわれている。明確なリーダーはおらず、各々の役割は流動的で、誰がどのような役割を担うかはその場にいあわせたメンバーどうしの関係性のなかでそのつど変化する。幼児の愛着行動は、そのように変化する集まりのなかで、母親をふくむ複数の養育者との相互行為をとおして生み出されていることがしめされた。

第3章では、バカの子どもがおこなう歌・踊りを記述し、その特徴を分析している。バカの歌・踊りにはその実践を推進する役割をもつ人が配置されておらず、それにもかかわらず全員が動作をあわせて動きが変化していく歌・踊りが多くみられた。この特徴は第2章で記述したバカの集団のあり方と類似していることが確認された。

第4章では、大勢のバカが集まる歌・踊りの場面で、離乳前の幼児が誰を「安全基地」として探索行動をしながら集団活動に参加しているのかを、母親の歌・踊りへの参加の度合いとの関係に着目して記述・分析している。幼児は、母親が接近可能な距離にいた場合でも、他の大人や年長児を「安全基地」として探索の範囲を広げ、歌・踊りに参加していた。愛着対象者たちは連携して幼児と母親の接近と分離のバランスをとっており、幼児の集団活動への参加を支援していた。その連携のもとで、幼児が主体的に愛着行動と探索行動をおこなうことができていると指摘した。

終章では、狩猟採集民における愛着概念について再検討し、今後の研究を展望している。バカの愛着と養育を理解するためには、子どもと養育者の二者関係ではなく、複数の養育者をふくむ集団全体を俯瞰的に把握する視点が必要であると指摘し、この分析枠組みを、子育ての「連携システム」と名づけた。また、バカの子育ての連携システムは、子育てのみに限定されているのではなく、生業活動や家事、歌・踊りなど彼らの生活全体にかかわる連携システムと連続している点を強調している。以上をふまえて、狩猟採集民の子育てを理解するためには、連携システムの全体性を念頭におきながら記述・分析する必要があると論じた。